

誌上 ギャラリートーク

Gallery Talk

01

瀬戸内国際芸術祭 2010 連携

高松コンテンポラリーアート・ アニュアル vol.01 — もうひとつの・カーニバル —

会期：2010年9月18日(土) ▶▶ 10月24日(日)



カミイケタカ《sea train》展示風景。
廃材による建造物、本物の線路、青い光などが五感を刺激します。

アニュアル、アニュアル…呪文にも思えてきそうなこの言葉、「1年に1度の」という意味があります。高松市美術館で開催される年に一度の現代アートの展覧会。それが「高松コンテンポラリーアート・アニュアル」です。

今回のテーマは「もうひとつの・カーニバル」。10月31日まで開催中の瀬戸内国際芸術祭との連携と対比を意図して開催されました。出品作家は、青木陵子さん、石田尚志さん、猪瀬直哉さん、そして高松出身のカミイケタカさんと山下香さんの5名の方です。

その中から、カミイケタカさんをご紹介します。カミイケさんは高校卒業後から現在まで舞台美術に携わり、その経験を活かしながら、平面・立体による作品制作を行っています。今回は、「sea train」と題して展示空間を海の中に変え、見る人を海の底へいざないます。10月16日にはダンサーの山下残さんをお迎えし、「sea train」を舞台にダンスパフォーマンスを披露していただきます。作品がもうひとつの顔をのぞかせるその時、あなたは何を感じるでしょうか。

今回の展覧会では、いずれの作家も高松に滞在し、展示室にあわせた独自の作品空間を作り上げました。今しか観ることのできない、高松市美術館でしか味わえない、ライブ感のある作品・空間を是非じっくりと、感じてみてください。[前田裕実]

02

植田正治写真展 写真とボク

会期：2010年11月2日(火) ▶▶ 12月5日(日)

植田正治は日本を代表する世界的にも大変評価の高い写真家です。生涯、生まれ育った鳥取県・境港を拠点とし、2000年7月に亡くなるまで、70年近く写真を撮り続けました。砂丘や海岸など山陰の風景に、人物をまるでオブジェのように配置した植田独自の「演出写真」の数々は、写真誕生の地・フランスでは「Ueda・Cho」と日本語表記そのままで紹介され、国際的にも高い評価を得ています。近年では、「龍馬伝」で主役を務める福山雅治さんが晩年の彼に撮影されたことで、これまで写真とは縁の無かった人達にも一層広く知られるようになりました。

植田は生涯自らを「アマチュア写真家」と称し常に自由な立場で楽しんで撮影する精神を忘れませんでした。その常に謙虚で自由な精神こそが、彼の独特な発想や作品を生み出したに違



ボクの私のお母さん 1950年 ©Shoji Ueda Office
鳥取砂丘に家族を配って撮影した1枚。
和気あいあいとした現場の楽しい雰囲気が伝わってくる。

いありません。没後2005年頃より再評価の動きが始め、国内外で回顧展や、新たな作品集の出版があいついでいます。近年従来のマニュアルカメラに加え、カメラは携帯電話やデジカメの普及に伴い、家庭で幅広くいろんな写真を楽しむ人が増えました。この機会に植田正治の「時代に流されない」自由で斬新な作品に触れてみてはいかがでしょうか。 [湊 節代]

時	記事	活動内容
4/1		しびのーと 21号発行
4/16～5/30	A	「カンヴァスに描かれた女性たち」展 ギャラリートーク (開催回数のべ 22回、参加者数のべ 500名)
5/8		「カンヴァスに描かれた女性たち」展 記念講演会 (講師: 広島大学非常勤講師・森川絃一郎氏) 参加
5/22・23	B	子どものアトリエ 「立体絵画をつくろう」(講師: 洋画家・松原芳久氏) アシスタント
7/17～9/5	C	「森村泰昌モリエナーレ/まねぶ美術史」展 ギャラリートーク (開催回数のべ 16回 (7/18・19 午後のぞく)、参加者数のべ 220名)
7/16		「森村泰昌モリエナーレ/まねぶ美術史」展 内覧会参加
7/18	D	「森村泰昌モリエナーレ/まねぶ美術史」展 記念対談 (講師: 美術家・森村泰昌氏、詩人・佐々木幹郎氏) 参加
7/18	E	高松うみあかりプロジェクトお披露目
7/19・8/7	F	「森村泰昌モリエナーレ/まねぶ美術史」展 関連・視「聴」覚教室プロジェクト - あなたの耳が作品に - (講師: 森村泰昌氏) アシスタント
8/7	D	「森村泰昌モリエナーレ/まねぶ美術史」展 トークショー (講師: 森村泰昌氏) 参加
8/7	G	美術館の日関連イベントアシスタント

※ギャラリートークは会期中の日曜・祝日、各午前・午後で開催

A 「カンヴァスに描かれた女性たち」ギャラリートークを終えて

ポーランドのヨハネ・パウロ二世美術館のコレクションから、女性の表現にスポットを当て、15世紀から19世紀にかけて描かれた女性像の変遷をたどる作品展でした。civiの仲間達と、聖書や神話、伝説、アトリエビュート(モチーフによる約束事)を調べ、絵画の中のモチーフを探し、パズルのように謎を読み解いて行く…。西洋絵画の楽しみ方の一つと言われる「読み解く絵画」の面白さが、少し理解出来ました。やっぱり絵画は、面白い! お客様にも、伝えられていると嬉しいのですが…。

「山上紀代」



豪華な額が付けられた重厚な西洋絵画の展示会は久しぶりでした。

B 「立体絵画をつくろう」アシスタントをして

2日間みっちりワークショップは久しぶり。まず1日目。子ども達は家からフタ付きの深めの紙箱を持参。セザンヌやダ・ウインチ、ミレーなどの名画をカラーコピーしたものから好きな一枚を選び、絵の背景や人物をハサミで切り分けて、箱の中で立体的に絵を再現します。切り抜かれた背景の空白部分

は絵具で描き足さないといけないので結構想像力が必要。みんなオリジナルの絵画よりも生き生きとなったようです。2日目は、子ども達がそれぞれ好きな絵を描き、オリジナル立体絵画を制作します。みんな前日に作り方をマスターしているの、箱のフタの裏まで背景を描き大きな作品にする子、蝶々や鳥を飛んでいるように立体的に貼る子など、みんな積極的に、会場は熱気にあふれていました。

「堀本真弓」



エル・グレコ(左)、セザンヌ(右)の絵画を立体化した作品。

C 「森村泰昌モリエナーレ/まねぶ美術史」ギャラリートークを終えて

森村泰昌さんといえば《肖像(ヴァン・ゴッホ)》など名画や女優などに自ら扮した作品でお馴染みですが、今回の展示会では、様々な美術家のスタイルを模倣して描いた、10代の頃からの森村さんの知られざる作品の数々が初公開されました。展示室には森村さんの作品と森村さんに影響を与えた作品(高松市美術館コレクションによる)が対になって60組ずらりと並びます。圧巻は、本展示会のために新たに制作された田中敦子さんの《電気服》。近寄るだけでも熱い田中さんの《電気服》を森村さん自ら身にまといポートレート作品を制作されたのです。展示会は森村さんの美術にかける愛と情熱がひしひしと伝わってくる感動すべきものでしたが、同時に森村作品と見事なカプリングを果たした高松市美術館コレクションの素晴らしさも実感することができました。

「宮見礼子」



「堀本真弓」

D 「森村泰昌モリエナーレ/まねぶ美術史」記念対談とトークショーを聴いて



岡本太郎作品と「岡本風」の森村作品の前で。このようなペア会場には約60組並びました。

記念対談は7月18日、森村泰昌氏と、森村氏の高校時代の美術クラブの恩師・佐々木幹郎氏のご子息、詩人の佐々木幹郎氏を招き行われました。恩師の思い出話も出て、和やかに進み、そんな中で…表現者は幼児体験をいかに維持していくかが大事である。新鮮な気持ちで一生涯懸命に向かい合っている時は、無心で自由で、表現者にとってそれは根幹の部分で重要なことである…と、お二人は話されていました。森村氏単独のトークショーは、8月7日「美術館の日」に行われました。…アーティストに言うてはならない言葉がある。それは「〇〇に似てますね!」。オリジナルティが大事な世界ですから、当然と言えば当然ですが、自分は



森村泰昌トークショー「まねぶこころとモリエンナーレ」から 2010年8月7日(土)



▲トークをする森村泰昌氏。

このトークショーのために、展示室出口で私への質問を受け付けていました。いろいろな質問をいただきましたが、その中から3つの質問を手がかりに展覧会についてお話ししたいと思います。

1つ目は最も基本的な質問です。「森村さんは、今回の企画はどうやって思いついたのですか？高松市美術館と自分の作品との組合せはどうやって決めたのですか？」昨年、高松市美術館さんからコレクション展の企画、プロデュースしてほしいという依頼がありました。そして3冊の立派な収蔵品図録を見ておりました、色々私の記憶の世界が甦ってきたんです。

高校生になると美術クラブに入り、油絵を描きはじめました。初めての油絵はモネ風の絵でした。これはもう残っていませんが、高台から見た家並みを印象派風に細かなタッチとパステル調で描いたものです。そのあと、美術クラブの部員や卒業部員らの影響も受けますが、ゴッホ、ヴラマンク、ユトリロらの絵をいいな、と思って描きました。ゴーギャン、マティス、マネはよくわからなかったですね。

高校2年生の時、19世紀の画家がはるか過去の人に思え、私が生きている今の画家たちに次第に興味が移りました。現代美術に興味を持っている人は周りにはおらず、図書館や古書店などで情報を集めました。その時の本を持ってきました。『美術手帖』1963年10月号増刊です。巻頭グラビアには加納光於、磯部行久、山口勝弘、前田常作、向井修二、ハイレッドセンター、荒川修作、工藤哲巳。今回の展覧会のメインの作品がほとんどすべてこの1冊に収められています。当時の私には大変刺激的で、一つ一つの情

報が強く頭に焼きつきました。[他にも2冊紹介]そしてこれらの本に掲載された憧れの作品をまねて描き、いっぱしの芸術家になった気分でした。

一見楽しそうに見えますが、本人は非常に苦しかった。楽しくはありましたが、芸術家と同じようには描けないし、友達にも見せず、閉鎖的な場所ですんどい思いをしていました。そして、いつしか、これらの作品は大したものでないと思ひ込み、記憶の底にしまいこんでいました。でも捨てることはせず、残していました。

ごく最近、気分がちょっと変わってきました。インタビューでよく、次の作品は？ときかれます。でも、次ではなく、自分の原点、表現の初期衝動を見直してみたいと思うようになりました。科学的には時間は過去から未来に一方的に流れます。でも次は？と聞かれると、結局過去に辿り着く、という時間感覚をリアルに感じます。例えば、高名な野球選手は最後には少年野球の指導に行き着くことが多い。若手育成というよりも、野球の醍醐味、野球の神様に触れた少年野球の輝かしい時代に戻ろうとするのでしょう。美術も同じような気がします。倉庫の奥にしまいこんでいた作品をぼちぼち開きかけていた時に、高松市美術館さんから今回の話をいただきました。もし10年前にこの話があったら今回の展覧会はありませんでした。所蔵品展をプロデュースしてほしいという美術館の依頼と、私の思いがうまくつながって、今回のラインナップが一気に出来上がりました。

2つ目の質問。「今回のコラボは偶然ですか？どこの美術館でもできることですか？」他館でもある程度はできますが、高松でしかできないのは田中敦子《電気服》とのマッチングです。《電気服》が高松にあったということが、今回の展覧会を思いつくコアになっているので、今回は高松市美術館ならではの企画といえます。

図録に電気服への私の思いを書いています。[『まねぶ美術史』144-45頁の文章を読み上げる]電気服が発表されたのは1986年ですが、制作されたのは1985年頃。当時私は、なかなかわからないけどゴッホの作品を一生懸命作っていました。その時すぐ近くで田中さんが金山さん[美術家の金山明。田中敦子の夫]と一緒に電気服のコードを、うまいこといかなあとか言いながら(笑)やっていたことに、私は運命的なものを感じます。勝手にそう思っているだけかもしれませんが(笑)。高校時代には田中さんのアトリエの横を通って通学していました。長い間知らない間のお付き合いをしていた

ことになります。2004年お二人は事故に遭われ、金山さんは大阪の病院に入院、田中さんははじめて看病していましたが、精密検査をするとかなり具合が悪く、奈良の病院へ。金山さんの入院先は父の緑茶商のすぐ傍の病院でしたので、よくお見舞いに行きました。田中さんは2005年12月、金山さんは2006年9月にお亡くなりになりました。父が亡くなったのが2006年5月。ここでも運命的なものを感じざるを得ません。

私の《電気服》との深い関係は「公の美術史」にはなんら関係ありませんが、私が言うところの「私(わたし)美術史」にとっては大切なもの。単なる個人的な思い出が公なるものとクロスすることで表現が生まれます。それは、一人だけのものではなく、いろんな人につながっていく可能性があります。



▲田中敦子《電気服》(手前)と森村氏の作品(奥2点)

最後の質問。「死なないで電気服とはどのような思いですか？」電気服は本来着るものなので、工夫して今回着せてもらいました。作りながら感じることは色々ありました。《電気服》は全灯すると4000ワットを超えます。今年は猛暑、炎暑といわれますが、《電気服》の中に入れてみてください。そんなもんじゃなく、熱い熱い(笑)。発光ダイオードと違って、地球温暖化を引き起こします(笑)。

そもそも人間自体発熱する存在。熱を発散しないというのは死んでいること。生きていたというのは心臓が動くこと。《電気服》の球は1回点滅させるごとに消耗しています。作品制作時、申し訳ないが、随分チカチカさせました(笑)。一生懸命生きていくということは、死に近づいていくということ。いずれ電気服も冷たくなります。「死なないで」というのは《電気服》への思い、また父をはじめ亡くした親しい人への思いもこめられています。

*牧野裕二(高松市美術館)がトーク内容を適宜抜粋・アレンジして書き起こしました。

ご案内

私たちと鑑賞をご一緒しませんか？

美術館ボランティア [civi (シヴィ)] による
ギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日
および祝日の午前11時～、午後2時～の
1日2回、2階展示室にて行います。

発行:高松市美術館 編集:civi & 牧野裕二(高松市美術館)
デザイン:福井裕子(高松市美術館)

高松市 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4
美術館 Tel: 087-823-1711 Fax: 087-851-7250

編集後記

■「うみあかり」制作は長丁場でしたが、高校時代の文化祭準備を思い出して、懐かしく楽しいものでした。アーティストの気分を味わえたかな!? [堀本真弓]
■感動と感謝は、多い程いはず。一人で多くの方が、美術館に足を運んで、感動を味わって頂きたいと思います。 [横井真由美]
■先日、香川の古木巨樹ツアーに参加しました。樹医さんによる説明があり、一層木への造詣と愛情が深まりました。これからも周囲の緑に目を配り自然の関心を持ちたいと思いました。 [湊節代]
■ポストン美術館展にいきました。まるで今までのギャラリートークのおさらいのようで猛暑の中楽しんできました。 [皆見礼子]
■私も高松しび検定に挑戦。12問中3問を間違える! …出

直しです。 [三好ひさこ]
■作庭家の重森三玲旧宅へ行って来ました。書院の天井に《あかり》が…、イサム・ノグチがユネスコ庭園を作る時に、日本の石を教え、協力したお礼に贈られたとの事。イサムさんもここに座って、庭を眺めたのかな…。 [山上紹代]
■今夏の香川の話はやはり瀬戸内国際芸術祭。猛暑の中、船やバスのスケジュールをやりくりしながらの島巡り・作品巡りは大変ですが、皆さんの楽しそうな表情が印象的でした。当館の一番の話題はというと、やはりモリエンナーレ(シヴィのみなさんはあかりプロジェクト?)。森村泰昌氏には超多忙中にもかかわらずお世話になり、深く感謝しております。いつもは展覧会が終わると寂寥感に襲われますが、モリエンナーレは今後全国巡回するので寂しくはありません。むしろ今後の各館の展開が楽しみです。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]